

バングラデシュ紀行

公益社団法人日本診療放射線技師会副会長
公益社団法人埼玉県診療放射線技師会会長
小川 清



平成 25 年 9 月 19 日（木）00 時 20 分、私は前日の仕事を終えて、酷暑がやや和らいだ東京羽田国際空港からタイ国際航空機に機上し、バンコク経由でバングラデシュ・ダッカに向かった。これは経済産業省が薦めている日本の医療機器と医療サービスを海外展開するための調査事業の一環として開催される、医療セミナーの講師を務めるためである。

早朝、着いたバンコク国際空港の巨大さに驚き、数時間の待ち時間を経て正午にバングラデシュ国ダッカ国際空港に降りた。ダッカ国際空港は、まさに建築中であり空港内にダンプカーやクレーンなどが置かれ、滑走路以外は未整備状態であった。空港ロビーでは VIP ルームに案内され関係者の歓迎を受けた。担当者からパスポートの提出を求められ、まとめて持って行かれた。入国作業が終わると、バングラデシュ国ナンバー 1 ホテルといわれている Pan Pacific Sonargon Dhaka の送迎バンが迎えにきた。トヨタ社製であるが汚れていて古かった。我々がバンに乗り込むと、自動小銃を持った兵士が助手席に乗り込んで来たことには驚いた。そして無造作に銃を置き、銃口の向きはこちらに向いている。窓の外を見ると銃を持った兵士がたくさん歩いており、治安は「比較的安全」と言われていたが少し不安になった。

道行く人たちの顔はインド系の人ほとんどであり、東南アジアとは違う地域に入ったということが実感できた。道路は悪く、慢性的渋滞、乱暴な運転と 3 拍子揃っている。従って車の外面はこすり傷だらけ。他の都市の渋滞とひと味違うところは、渋滞しているのが自動車だけではないことだ。バングラデシュで最も一般的な移動手段は「リキシャ」という三輪自転車。自転車の後ろに二人くらい座れる客席が付いていて、運転手が一生懸命漕いで目的地に向かう。自動車と同じ道路を走るリキシャ。ぶつからないよう常にベルを鳴らしており、坂道では押して上る。市民は気軽に利用し、50 円から 100 円の運賃で、ダッカ市だけで 100 万台以上が走っているという。市民の交通手段の中心は、日本の軽自動車を三輪車にしたようなオート三輪車。お客さんを車内に乗せて、真っ黒な煙をまき散らしながら、無数のオート三輪が走っている。これに加えて、屋根上まで溢れんばかりの人を乗せた傷だらけのバスが走り、道路は慢性的な渋滞になっている。交差点では脇から無理矢理入り込んでくるので、気の弱い人はこの国では運転できない。渋滞道路の車は時速 5km/h 程度で動くので、歩行者が入り込んで横断していく。信号はほとんど無いが、あっても無視だ。

今回、経済産業省からの要請を受け、日本診療放射線技師会から派遣された。セミナーは、首都ダッカにあるホテルに約 500 人の技師・医師・行政関係者が集まって開始された。私の発表内容は、最新の求められている画像診断はなにか。そして支える技術の現在と将来展望は？および日本の診療放射線技師育成システムなどを紹介した。加えて最新の技術を学ぶテクニカルセンター、また大学の創設、インターネットを利用した放射線機器のリモート・メンテナンス、日本での研修についても提案した。30 分間の英語

スピーチは初めての経験であったが、スライドの力を借りつつ、なんとか終えることが出来た。

セミナー修了後、一人の男性が「小川さん」といって近づいてきた。「わかりますか？ Sです」「もちろんわかりますよ」と応え、握手をして再会を喜んだ。Sは以前私が勤務していたS大学に研修医として配属され、その後整形外科医として働いていた医師だ。「技師MやSは元気ですか？」「はい元気ですよ」。彼は外務省医務官として、低開発国を主に回っており、ナイロビから今年バングラデシュにきた。翌日の夕食後、彼から今回のメンバーにバングラデシュの医療の現状をレクチャーしてもらい、改めて日本人の清潔感覚の素晴らしさに気付かされた。

翌日は病院見学をした。UNITED HOSPITAL LIMITEDはCEOがおり、富裕層を対象とした米国経営型の病院で、全てが新しくきれい。患者も多いが、多すぎるといふ雰囲気ではなかった。職員も新しい病院、新しい装置でやる気がある。放射線機器は全てGE製であった。

2カ所目はBSMMU HOSPITAL (Bangabandhu Sheikh Mujib Medical University)。大学病院であるが建屋が古く、患者数が異常なほど多い。暗くエアコンのない廊下に座り込んで診察を待つ。そして廊下のみならず軒先まで、庭まで。室内も暗く不衛生、ほこりぼっく、そこにいと病気になるようだ。病室の中は1.5m高さのコンクリート壁で仕切られ、そのエリアに4人分のベットあり。CTはシーメンス、MRIは日立製であった。

バングラデシュの医療は、医療スタッフが極端に少ない。医師は技術を身に付けるために海外留学するが、帰国する医師は少ないと聞いた。看護師は身分的な問題からなり手が少なく、診療放射線技師数も少ない。しかもダッカ市内に集中しているようだ。医療機器はODA支援によりある程度揃っているが、機器を使いこなす診療放射線技師の不足と、メーカー営業所が国内になく維持管理とメンテナンスも課題となっている。最終日には、バングラデシュの診療放射線技師会のメンバーと意見交換したが、特に訴えていたことが機器メンテナンスについてであった。

今回、バングラデシュということで、衛生状態が悪いという予測のもとに当院の感染管理認定看護師に相談したところ、予防注射をしようということで2種3回の注射をした。ほとんどホテルとバス移動の滞在だったため、不衛生とは思感なかったが、中心地を外れるといろいろと目につく場所も多くあった。バングラデシュは高速道路も建設中、地下鉄もないが1.6億の人口があり、しかも年齢が若く活気がある。日本でいえば何もなかった終戦時にi-phoneやi-padが入り乱れ、車はあるが道路が整備されていないといったところであろうか。根幹の社会のシステム作りが大幅に遅れている印象であるが、これから急速な発展が期待される。



30 分の英語プレゼン

セミナー会場



経済産業省調査事業メンバーと
バンラデシュ放射線技師会の皆さん



乗り合いバス



オート三輪車とリキシャ